

鉄筋網を用いた底生生物の効果的な保護育成方法の検討

山口県環境保健センター

梶原 丈裕・恵本 佑*・川上 千尋・山瀬 敬寛・下濃 義弘・堀切 裕子・上原 智加・
谷村 俊史・田中 克正・佐々木 紀代美

* 現 環境政策課

第 21 回 自然系調査研究機関連絡会議 調査研究・活動事例発表会 要旨集, 25(2018)

榎野川河口干潟(南潟)のアサリは、ナルトビエイやクロダイの食害に加え、同じくアサリを捕食するサキグロタマツメタやアカニシが生息しているため、漁獲可能なサイズまで生存させるためには何らかの保護対策が必要である。

一般的な保護手法としては、被覆網を設置が知られているが、その縁を埋めることが重要とされている。南潟では、縁を埋めても台風や波浪によって網の捲れ等が発生するため、網のメンテナンスに労力がかかることやアサリの網外への散逸、食害生物の侵入が課題となっている。

これまでの調査研究で、図 1 のように網の縁に鉄筋を取り付けた網（以下「鉄筋網」）を用いることで、網の縁を埋めずとも、一定の振動が抑えられ、アサリやアサリ以外の底生生物への保護効果があることが分かってきた。

今回、アサリやその他の底生生物をより効果的に保護育成する鉄筋網の設置方法について検討したところ、図 2 のとおり 9mm メッシュの鉄筋網で最も保護効果が認められた。

また、アサリの個体数増加に伴い、アサリ以外の底生生物の数も増加し、図 3 のとおり正の相関が確認された。



図 1 網の縁に鉄筋を取り付けた網（鉄筋網）

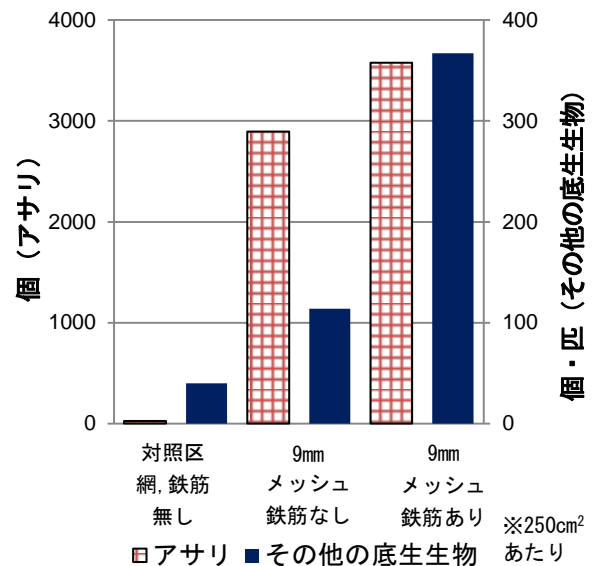


図 2 網の違いによるアサリとその他の底生生物数

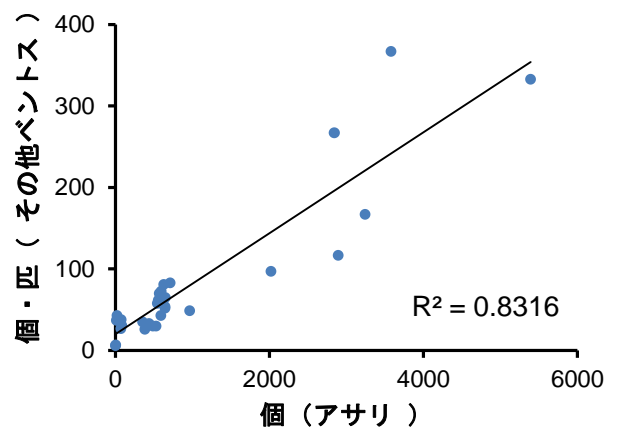


図 3 アサリとその他の底生生物の個体数の相関